

4年制専門学校の作業療法学科学生が専任教員に求める会話の内容

難波和広*1 井村 亘*1*2 香川美恵子*1 大西正裕*1

要旨：本研究は、4年制専門学校の作業療法学科（以下、作業療法4年制専門学校）学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に資する基礎的な資料を得ることをねらいとして、作業療法4年制専門学校学生が専任教員に求める会話内容を質的に明らかにすることを目的に調査を実施した。調査内容は、性別および講義外（休憩時間、放課後）の時間に専任教員との会話で話したい話題（以下、会話内容）とし、自由記述で回答を求めた。分析方法は、得られた記述の内容を熟読して不要な部分を削除し、記述をひとつの意味のある内容にコード化し、それぞれのコードを内容的類似性に基づいてカテゴリ化した。また、各カテゴリに含まれるコード数を算出した。対象は、岡山県A専門学校の作業療法学科に在籍する1～4年生の72人であった。その対象者から144のコードが抽出され、【作業療法士としての未来像（80コード）】、【ストレス対処（5コード）】、【生活（33コード）】、【人間関係（9コード）】、【日常会話（17コード）】の5つの大カテゴリに集約された。これらの5つの大カテゴリの会話内容は、作業療法4年制専門学校学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に活用することが可能であると考えられる。

キーワード：作業療法学科学生、会話内容、専任教員

はじめに

現在、国公立大学（短期大学を含む）及び高等専門学校における1年間の退学者率は1.95%である¹⁾。一方で作業療法士養成校の退学者率は17.5%となっており²⁾、高いことが示されている。作業療法養成課程は3年制専門学校、4年制専門学校（昼・夜間）、大学課程などがあるものの、退学者率が最も高いのは4年制専門学校（昼間）の25.6%であり²⁾、4年制専門学校の作業療法学科（以下、作業療法4年制専門学校）学生の退学者率の低減は養成校にとって喫緊の課題である。そのような、作業療法4年制専門学校学生の退学理由の上位に「精神的な不調」があり³⁾、退学率の低減に向けて、学生に対する精神的な支援の必要性は高い。特に専任教員は、学生が日常時間の大半を過ごす作業療法士養成校という社会で、最も近くに居合わせながら、学業、生活面に多くのかかわりをもつ存在であり、支援において重要な存在であると考えられる。

さて、精神保健的「援助」を考える枠組みをソーシャルサポート（家族や友人、職場、地域社会などの人間関係を通じて行われる社会的支援）として捉え、その現象理解や効用に関する研究が蓄積されている³⁾。ソーシャルサポートの授受には、「サポート受容者（以下、受容者）とサポート提供者（以下、提供者）」が存在する⁴⁾。また、ソーシャルサポートは、

*1 玉野総合医療専門学校 作業療法学科

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学研究所 健康科学専攻 博士後期課程

(〒701-0193 岡山県倉敷市松島 288)

実行されたサポートと期待されたサポートに分類できる。実行されたサポートとは、実際に受けたサポートの経験であり⁴⁾、期待されたサポートとは、困った時にはサポートしてくれるであろうというサポートの利用可能性についての認知である⁴⁾。精神的安寧への影響を考えるのであれば、実行されたサポート期待よりも期待されたサポート（以下、サポート期待）の方が重要であるとされている⁵⁾。

さて、サポート期待に影響を与える大きな要因に受容者と提供者の関係性があり⁶⁾、その関係性は、受容者の特性、提供者の特性、受容者と提供者の社会的相互作用の3つの要素によって構成されていると考えられている⁷⁾。その3つの要素の中でも、受容者と提供者の社会的相互作用が受容者と提供者の関係性を構成する最も大きな要素であることが明らかとなっている⁸⁾。

ソーシャルサポート理論の中でも受容者と提供者の社会的相互作用に重きを置いた理論に Relational Regulation Theory⁶⁾（以下、RRT）がある。RRTでは、社会的相互作用の特に受容者と提供者間の日常的な会話を、サポート期待や精神的健康を規定する大きな要因として位置付けている。実際に大学生、海兵隊員などを対象として日常的な会話の質がサポート期待や精神的健康に影響を与えることが明らかになっており、学生と専任教員との関係においても日常的な会話は重要であることが推察できる。特に多数の学生と関わる必要がある専任教員において、学生が専任教員に求める日常的な会話内容の知見は、学生の専任教員に対するサポート期待や精神的な健康の向上に向けた汎用性の高い学生への関わり方への示唆に繋がると思料する。

そこで、本研究は、作業療法4年制専門学校学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に資する基礎的な資料を得ることをねらいとして、作業療法4年制専門学校学生が専任教員に求める日常的な会話内容を質的に明らかにすることを目的に調査を実施した。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、自記式質問紙調査に基づく質的記述的研究とした。

2. 調査対象

包含基準は作業療法4年制専門学校学生とし、調査対象は岡山県A専門学校（以下、A校）作業療法学科学生とした。

除外基準は、同研究に同意を得られなかった学生とした。

3. 調査方法

調査は2023年7月下旬～8月上旬に実施した。調査内容は、性別および会話内容とした。会話内容は自由記述で回答を求めた。回答方法はホームルームの時間に、研究者または教員より調査の趣旨を伝え、質問紙に記入、回収する方法をとった。

4. 分析方法

分析は Berelson の内容分析⁸⁾の手法に基づいて行った。Berelson の内容分析は「表現されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、かつ数量的に記述するための調査法」⁸⁾あり、単一の内容が表現された文章を最小記録単位とし、内容的類似性に基づいて分類したうえで、各カテゴリの特徴と分類されたコードの数で総合的に評価するという特徴を持っている。

具体的な方法は、まず全回答の素データ一覧表を作成し、素データの文脈単位から主語や述語等の不要な部分を削除したうえでコードを抽出した。その後、質的研究に精通する専門家、精神保健分野の研究を多数実施している医療系専門学校教員 1 名の助言を受けながら 2 名の医療系専門学校教員を分析者とし、得られたコードを抽象化などの言い換えを行いカテゴリ化した。この段階で「問いに対応していない記述」、「意味を理解することが困難な記述」は、分析者間で検討を繰り返した後に分析対象から除外した。さらに、コード群と単独のコードを分析者間で意味内容の類似性に基づいて分類する作業を繰り返し、命名することで小カテゴリ化、中カテゴリ化および大カテゴリ化を行った。この作業は、専任教員に求める会話の意味合いは何かという視点に基づいてコード、小カテゴリ、中カテゴリの統合を進め、大カテゴリを生成した。次にそれぞれの小カテゴリ・中カテゴリ・大カテゴリにおけるコード数を算出した。これらの作業における分析者間の意見の不一致点については、十分な協議のうえで合意形成を図った。

5. 倫理的配慮

調査対象者には研究目的、内容、手順、利益、不利益、匿名性について質問紙に明記し、実施には専任教員が口頭で説明した上でアンケートへの協力を求め、結果公表に際しては、匿名性を保証した。データは本研究の目的以外には使用しないこと、参加および途中辞退は自由意志であり参加の拒否や、白紙での提出も可能なこと、同意後の中止等による不利益は一切ないことを説明した。なお、本研究は玉野総合医療専門学校の承認（研究計画番号：2023002）を得て実施した。

結果

1. 対象者の概要と属性分布

A 校の作業療法学科に在籍する 1～4 年生の 86 人の内 76 人から回答を得た（回収率 88.3%）。分析にはこれら回答のうち必要な調査項目に欠損値を有さない 72 人分の記述を使用した（有効回答率 94.7%）。回答者の属性分布は表 1 に示した。

表1 属性分布

	人(人数)		
	男性	女性	合計
1年生	2	9	11
2年生	2	14	16
3年生	6	12	18
4年生	12	15	27
合計	22	50	72

2. 学生が専任教員に求める会話内容

分析対象となった72人分の記述から148コードが抽出された。このうち「問いに対応していない」2コード、「意味を理解することが困難な記述」2コードの計4コードを除く、144コードを分析対象とした。その144コードを意味内容の類似性を基に分類した結果、勉強、試験、実習、作業療法士（以下、OT）の経験談、OTの事情、就職活動、ストレス対処、クラスについて、学内行事、趣味、先生のプライベート、学生のプライベート、友人関係、恋愛、時事ネタ、雑談の16の小カテゴリが生成された（表2）。さらに、前記16の小カテゴリを意味内容の解釈を重ね、類似性から勉強、試験、実習はOTスキル習得に集約された。また、OTの経験談、OT事情、就職活動は進路に集約された。OTスキル習得および進路についてはさらに解釈を重ねた結果、OTとしての未来像に集約された。また、クラスについて、学内行事は学校生活に集約された。趣味、先生のプライベート、学生のプライベートはいずれも学内生活に集約された。こうして集約された学内生活および学外生活は生活として集約された。友人関係と恋愛については人間関係に集約された。時事ネタ、雑談については日常会話として集約された。こうして16あった小カテゴリはストレス対処とともに中カテゴリから5つの大カテゴリに集約された。

以下、コード例を《 》, 小カテゴリを〈 〉, 中カテゴリを[], 大カテゴリを【 】で表わす。

1) 【OTとしての未来像（80コード）】

学生は《授業でわからないところ》《授業で困っているところ》などの〈勉強〉や、《良い点を取るためには》《問題の解説》などの〈試験〉について、《実習先の雰囲気》《どういうところをみられるか》などの〈実習〉から[OTスキルの習得]に関する会話を専任教員に求めていた。また、《臨床現場での成功談》《臨床現場での失敗談》などの〈OTの経験談〉に、《作業療法士に関するニュース》《就職事情》などの〈OT事情〉に、《どの分野に進むのがいいのか》《自分に向いている分野を聞きたい》などの〈就職活動〉から[進路]に関する会話を求めていた。これらを集約して【OTとしての未来像】と命名した。

2) 【ストレス対処（5コード）】

学生は《程よい力の抜き方が分からない》《このままで大丈夫なのか》に関する会話を専任教員に求めていた。そのため【ストレス対処】と命名した。

3) 【生活（33コード）】

学生は《クラスメイトについて》《学校生活のこと》などの〈クラスについて〉や、《学祭でどんなことをしていたか》《一年間のスケジュール》などの〈学内行事〉から[学内生活]に関する会話を専任教員に求めていた。また、《アニメやゲーム》《バイクや車》などの〈趣味〉や、《家族について》《休日何をしたか》などの〈先生のプライベート〉に、《一人暮らし》《アルバイト》などの〈学生のプライベート〉から[学外生活]に関する会話を専任教員に求めていた。これらを【生活】と命名した。

4) 【人間関係（9コード）】

学生は《ぐち》《面白かったこと》などの〈友人関係〉や、《働き始めてからの出会い》《先生の恋愛について》などの〈恋愛〉に関する会話を専任教員に求めていた。これらを【人間関係】と命名した。

5)【日常会話 (17 コード)】

学生は《最近あった出来事》《テレビやニュース》などの〈時事ネタ〉や、《話題を出して欲しい》《楽しい話をしたい》などの〈雑談〉を専任教員に求めていた。これらを【日常会話】と命名した。

表2 学生が求める専任教員との「会話内容」

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	コード例	コード数(144)
OTとしての未来像	OTスキル習得	勉強	・授業で分からなかったところ ・困っているところ	17
		試験	・良い点をとるためには ・問題の解説	19
		実習	・実習先の雰囲気 ・どういところをみられるか	10
	進路	OTの経験談	・臨床現場での成功談 ・臨床現場での失敗談	12
		OT事情	・作業療法士に関連するニュース ・就職事情	3
就職活動	・どの分野に進むのがいいか ・自分に向いている分野を聞きたい	19		
ストレス対処			・程よい力の抜き方が分からない ・このままで大丈夫なのか	5
生活	学内生活	クラスについて	・クラスメイトについて ・学校生活のこと	2
		学内行事	・学祭でどんなことをしていたか ・一年間のスケジュール	2
		趣味	・アニメやゲーム ・バイクや車	19
	学外生活	先生のプライベート	・家族について ・休日何をしたか	7
		学生のプライベート	・一人暮らし ・アルバイト	3
人間関係	友人関係	・ぐち ・面白かったこと	2	
	恋愛	・働き始めてからの出会い ・先生の恋愛について	7	
日常会話	時事ネタ	・最近あった出来事 ・テレビやニュース	5	
	雑談	・話題を出して欲しい ・楽しい話もしたい	12	

考察

本研究によって、作業療法4年制専門学校学生が専任教員に求める会話内容が質的に明らかとなった。明らかとなった学生が専任教員に求める会話内容は、【OTとしての未来像】、【ストレス対処】、【生活】、【人間関係】、【日常会話】の5つの大カテゴリに集約された。

【OTとしての未来像】に含まれるコード数は、全コード数の半数以上を占めていた。【OTとしての未来像】は、OTに至るまでや、OTになった後の将来像に関する会話内容であり、現在生じている学業的な課題や、将来起こることが予測される仕事に関する課題の解決に

向けた会話内容として捉えられる。また、【ストレス対処】についての会話も学生は専任教員に求めていることが明らかとなった。【ストレス対処】は、上記の【OTとしての未来像】に含まれる学業や仕事に関する課題と異なり、より具体的なストレス対処方法に関する会話内容として捉えることができる。さて、我々は緒言において専任教員が学生のサポート期待を高めるかかわりが求められる必要性を説いた。ソーシャルサポートの機能は、情緒的サポートと道具的サポートの二種に大別できると考えられている⁹⁾。情緒的サポートは勇気づける、励ます、共感するなどの傷ついた自尊心や情緒に働きかけるような援助である¹⁰⁾。一方、道具的サポートはストレスを解決するために必要な資源を提供したり、自身でその資源を手に入れることができるような情報を与えたりする援助であり¹⁰⁾、提供者が専門家である場合に有効であることが考えられている¹¹⁾。本研究で抽出された【OTとしての未来像】、【ストレス対処】は道具的サポートに含まれる内容であると捉えることができ、本研究結果は多くの学生は、専任教員に対して道具的サポートを期待していると解釈できる。このことを勘案すれば、学生が専任教員という学習・生活指導の専門家に対して解決すべき課題である学業関連の会話や、ストレス対処方法についての会話を求めていることは理解できる。

また、学内・学外の【生活】、友人関係・恋愛関係などの【人間関係】、時事ネタ・雑談などの【日常会話】についても学生が専任教員に求める会話内容であることが明らかとなった。これらの会話内容は学生自身や専任教員の私的な内容が多く【OTとしての未来像】、【ストレス対処】の会話のような課題解決に向けた会話ではなく、会話自体を目的とした会話として捉えられる。コミュニケーション自体が主目的であるコミュニケーションは、自己充足的コミュニケーションと呼ばれ、人と人との交わり¹²⁾や相互理解¹³⁾、関係性の維持¹⁴⁾に重要であると考えられている。このことから、前記の会話内容に配慮した専任教員の学生との関りの実践は、学生の専任教員に対するサポート期待や精神的健康の向上はもとより、専任教員との関係性の構築に有効である可能性があると思料する。

RRTにおいて受容者と提供者間の日常的な会話は、サポート期待や精神的健康において重要な要因として位置づけられていることを鑑みれば、本研究で抽出された5つの大カテゴリの会話内容を作業療法4年制専門学校学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に活用することが可能であると考えられる。しかしながら研究対象者は、4年制作業療法士養成校1校の限定された集団であり、学生の専任教員に対するサポート期待を規定する要因を見出せたとはまでは言い切れない。そのため、今後は母集団の属性分布に合わせた対象者の抽出により、学生全般に対する妥当性の高い結果を得るための調査を実施し、資料を蓄積させることが必要である。

結論

本研究は作業療法4年制専門学校学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に資する基礎的な資料を得ることをねらいとして、作業療法4年制専門学校学生が専任教員に求める日常的な会話内容を質的に明らかにすることを目的に調査を実施した。その結果、本研究で抽出された5つの大カテゴリの会話内容は作業療法4年制専門学校学生のメンタルヘルスの向上に向けた専任教員による支援に活用できる可能性があることが明

らかとなった。本研究結果は、会話内容に配慮した専任教員の学生との関りの実践により、学生の専任教員に対するサポート期待や精神的健康の向上はもとより、専任教員との関係性の構築に有効である可能性を示すものである。

利益相反

本研究による利益相反はない。

謝辞

本研究を行うにあたり、快く調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 1) 文部科学省：学校に関する状況調査，取り組み事業例等 学生の修学状況（中退者・休学者）等に関する調査【令和 3 年度末時点】（令和 4 年 6 月 3 日），文部科学省ホームページ，https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf（参照 2023-10-24-18：45）
- 2) 厚生労働省：理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会．厚生労働省ホームページ，<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000168990.pdf>（参照 2023-10-23-19：30）
- 3) 浦光博，南隆男，稲葉昭英：ソーシャル・サポート研究—研究の新しい流れと将来の展望—（東京：社会心理研究，4，1989）78-90
- 4) シェルドン コーエン，ベンジャミン HU，リン GU：社会的関係と健康．シェルドン コーエン，リン GU，ベンジャミンHU 編．ソーシャルサポートの測定と介入（東京，川島書店，2005）3-34
- 5) Cohen S and Wills TA：Stress, social support, and the buffering hypothesis. Psychological Bulletin 98: 310-357, 1985
- 6) Lake B and Orehek E：Relational regulation theory: A new approach to explain the link between perceived social support and mental health. Psychological Review 118: 482-495, 2011
- 7) Lakey B, Randy VM and Elizabeth F：Ordinary social interaction and the main effect between perceived support and affect. Journal of Personality 84: 671-684, 2015
- 8) Bernard B：Content analysis in communication research（New York: FreePress, 1957）
- 9) 橋本剛：ストレスと対人関係（京都：ナカニシヤ出版，2005）
- 10) 浦光博：支え合う人と人—ソーシャル・サポートの社会心理—（東京：サイエンス社，1992）
- 11) Dakof A and Taylor SE：Victims' Perceptions of social support: What is helpful from whom? Journal of Personality and Social Psychology 58: 80-89, 1990
- 12) Festinger L：Informal social communication. Psychological Review 57: 271-282, 1950
- 13) 船津衛：コミュニケーション・入門（東京：有斐閣，改変版，2010）
- 14) 古谷嘉一郎：コミュニケーションが関係維持に及ぼす影響についての友人関係機能の介入効果．比治山大学現代文化学部紀要 17：79-87，2011